
Girl, Glasses, and Guns / 少女と、眼鏡と、銃

冬城カナエ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G i r l , G l a s s e s , a n d G u n s / 少女と、眼鏡と、銃

【Nコード】

N 8 2 8 6 A

【作者名】

冬城力ナエ

【あらすじ】

【深夜のマイアミ。ギャングに追われる二人】マイアミの最下層で暮らすストリートキッズの少女、アンジェリカは、ある事件を目撃してしまったことでギャングに命を狙われてしまう。しかし見知らぬ眼鏡の男が助けに来て……。 90年代クرائمノワール映画風、ガン・アクション。

「何はともあれ、眼鏡を手に入れることが先決だ」

銃撃が止まった一瞬。店内のレジカウナーの下に潜り込むなり、男はそう言った。強い力で腕を引かれ、あたしは転んで膝をすりむいていたのだけど、抗議してる場合じゃなかった。いくら学校に行っていないからって、今の状況が相当ヤバイことぐらい、あたしにだって分かる。

「眼鏡？ 武器は手に入なくていいの？」

「銃は持つてる。眼鏡がない」

「何よ、眼鏡、眼鏡って……。他に持っていないの？」
「ない」

ジロリと、男はあたしを睨んだ。黒尽くめの服装は見るからにカタギじゃない。白人で、ちよつと訛りがあるから、たぶんヨーロッパ系の移民だと思う。オシャレにしようとして失敗したみたいなボサボサの黒髪に、瞳は澄んだブルー。40過ぎのオッサンかと思ったけど、意外に若いのかも。

「お前さん、自分がどれだけ大変なことをしたか分かってるか？俺の眼鏡だぞ。俺は眼鏡がないと、この距離でお前の目がいくつあるか分からないぐらいの近眼なんだよ。銃も撃てない。分かるよな」
「だって、オッサンが、あたしのこと攫おうとしてるのかと思っただから」

「オッサンじゃない。……マクラ克蘭だ」

男はそう名乗って、ため息をついた。無骨な銃を持ったままの手を、Aマートと書かれたショッピングカゴに引っ掛ける。あたしはさっきと同じようにもう一度謝った。彼の眼鏡を割ってしまったことを。

何で、彼の眼鏡を割ってしまったかつて？ 誰だっていきなり後ろから抱きかかえられたらビックリするし、暴れて眼鏡を引っ掛けたりもすると思うんだけど。

そんなことよりも、今のこの状況。深夜のショッピングセンターで、見知らぬガンマンと二人。あたしたちがギャングに命を狙われているのには、もちろん理由がある。

あたしの名前はアンジェリカ。年齢はたぶん15才。“たぶん”っていうのは、ママがわたしを生んだ年をよく思い出せなかったから。ママはキューバから、このマイアミに移り住んだって言った。もちろん、あたしはその島国がカリブ海に浮かんでることぐらいしか知らない。

ママがいなくなっただけからは、広い広いマイアミ・シティがあたしの家になった。どこに住んだって自由。つまり宿無しになったってこと。

バーガー・キングの裏口の常連になり、同じような男の子や女の子たちと一緒に暮らす毎日。それなりに楽しい日々が終わりを告げたのは、三日前のことだった。

その日あたしは、たまに優しくしてくれたり、小遣いをくれるギヤングのナイスガイ・ガイドに会いに、クラブ“モランデル1986”に行った。時間は日付が変わるか変わらないかぐらい。

ガイドは顔を合わせるなり、あたしにマルガリータの入ったグラスを渡して、裏口から外に追い出した。黒い鼻の頭にいっぱい汗をかいて。ガイドはあたしの背中を押しながら、今ちよっと取り込み中なんだ、と囁いた。

じゃ、待つてる。あたしは従順そうにうなづいて、裏口の階段に座り込んでガイドを待つことにした。マルガリータを飲んだあとは、何もすることがなくて、ただ店の中から流れてくる歌を口ずさんで

た。

音楽が突然止んだのは、それからしばらくたってからだった。不思議に思って裏口のドアに近寄ったら、誰かが猛然と走ってくる足音。あたしの勘がヤバイと告げた。慌てて、近くのゴミ溜めの影に隠れるのと、重いドアが勢い良く開いたのは同時だった。

出てきた男たちは6人。ヒスパニック系で、そろいも揃って黒い服を着て、手にはマシンガンみたいな大きな銃を持つてる。首や手が赤い。誰かの返り血だ！ と、いうことは……。

みんな、殺されちゃったんだ。

突然、ものすごく怖くなって、しゃくり上げそうになって。あたしは自分の口を手で押さえた。ハートが胸から飛び出してしまいそうだった。身体が震えないようにネズミみたいに丸くなって、息を潜める。彼らが走り去っていくまで。

足音が聞こえなくなっても、あたしは怖くてなかなか立ち上がれなかった。ゴミ溜めから這い出して、そろそろとクラブの中を覗いてみる。ガイド……。小さく彼の名前を呼びながら、店の中に入った。ひどい匂い。

「ガイド！」

ホールの真ん中に倒れてた彼を見つけて駆け寄った。うつ伏せに倒れてる彼の背中に、大きな赤い染みが出来ていた。目を開けたままのガイド。あたしは彼を呆然と見下ろし、そばに屈もうとした。

「……知り合いかい？」

その時いきなり後ろから声をかけられて、あたしは仰天してキャツと声を上げてしまう。振り返ったらバーカウンターのところに警官の服装をした男が立っていた。ニコリ、警官は微笑んでみせる。「どこに隠れてたんだい？ お嬢ちゃん。怖かったろう？」

「あたし……」

お巡りさんだ。ホツとして彼の方に近寄ろうとして、足を止めた。サイレンの音はしていない。男は一人。あたしは正面のドアを見た。内側からカンヌキがかけられてる。他の出入り口は裏口だけ。

と、いうことは！

考えてるヒマはなかった。あたしは、裏口に向かって駆けた。もちろん警官が反応して追いかけてきたけれど、あたしの方が速かった。人生のうちあんなに速く走ったことはないってぐらいに、あたしはとにかく逃げた。

その後あたしは、友達のところにも行かず、できるだけあそこから離れようとストリートを転々としていた。そして三日間。疲れ果てて、Aマートの裏口あたりを歩いてた時、いきなり見知らぬ男に後ろから抱きすくめられたってワケ。

ねえ、くどいようだけど。そんなとき暴れるなって方が無理だと思う。あたしの手が当たって、彼の眼鏡が地面に落ちて割れたとき、あたしたちを狙って、銃弾の雨が横殴りに降り注いだ。

黒服の男、マクラ克蘭はあたしを抱えたままAマートのガラスを割って、中に飛び込んだ。どつかのギャングが見えないところから、あたしの命を狙ってることは明らかだった。そして、突然現れた男、マクラ克蘭がわたしを守ってくれようとしていることも。

「三日前、お前が見たのは、ギャングの“ブラック・ボウラー”と“アルヴァレス・モブ”の抗争だ」

マクラ克蘭は、ハンドガンの銃底に弾倉カートリッジをはめ込みながら言う。あたしはあたしで、近くから失敬してきたホットドッグをほおばりながら、彼の仕草を見つめている。思えばこの三日間、ろくなものを食べてなかったから。

「その襲撃でブラック・ボウラーは壊滅的な打撃を受けた。しかし世間では、それがアルヴァレス・モブの連中じゃなく、ファーガソンさんの仕業だと噂になっちまってるのさ」

「ファーガソン、って、えっと……マフィアの？」

「マフィアじゃない。“実業家”だよ」

と、そう言いながらもマクラ克蘭は皮肉っぽく笑った。「俺の雇い主を悪く言うもんじゃない。マイアミが犯罪都市だったのは過去の話で、彼はもう足を洗った人間だ。……まあ、今だに、ファーガソンさんを快く思わない連中が、この町に大勢いるってことさ」彼の黒いジャケットの中にいくつものメタルの輝きが見えた。確かに、武器は足りてゐるみたい。

「お前はアルヴァレス・モブの連中を見たんだろう？」

「うん、ヒスパニック系の人たちだった」

「もう一度、そいつらの顔を見れば分かるか？」

「たぶん」

「よし」

カシャン。最後の銃に銃弾を補填して、マクラ克蘭は言った。

「お前を無事に、法廷まで連れていくのが俺の仕事だ。だからまず
は……」

「眼鏡、でしょ？」

「そつだ。察しがいいな」

ニヤと彼は笑った。法廷についていうものについて、あたしはテレビドラマでやってる以上のことを知らなかったけど。深夜のショッピングセンターで撃ち殺されるよりかは、ずっとマシだと思った。

「二階に、眼鏡売り場があるよ」

「OK、階段はどっちだ？」

「エスカレーター、すぐそこだけど」

「駄目だ。遮蔽が取れないし、恰好の標的になるぞ。階段を探せ」

あたしは、そろそろと立ち上がり暗闇に目をこらす。チュン！ 入口に近い方から弾が飛んできたけど、大丈夫。当たらないで済んだ。階段、あつちよ」

「どっちの方向だ。時計で言ったら？」

「時計？ ナニ？」

「入口の方を12時としたら、8時か、4時の方向か、どっちだ？」

ああ、やっと意味が分かった。「7時の方向？」

「よし、いい子だ」

マクラクランは低い姿勢で立ち上がり、目を細めて自分なりに状況を確認しようだった。

「俺が先に行くから、お前は俺がいいと行ったら移動するんだ。分かったな」

階段のある方を見、彼はもう一度振り返ってあたしの顔を見降ろす。

「ええと……」

「アンジェリカよ」

「OK、アンジェリカ。ここを出たらチョコレート・サンデーを奢ってやるよ。クリームがたっぷりかかっているヤツをな！」

言うなり、マクラクランは飛び出した。あたしはその姿を見失うまといと目を凝らす。

彼が走り出した方向は入口とは反対側。7時の方向に走り出した彼の影を追うように、タツ、タンツ、と銃弾が飛んできた。マクラクランはキレイに床を転がりながら、オレンジの缶詰のタワーの影に半身を隠すと、腕をまっすぐ伸ばした。その手には黒光りする銃。彼の銃が唸ったのは三回。入口の方で男の悲鳴が一つ。ガラスが何かが割れる音が二つ。

「早く！」

マクラクランがあたしに手招きした。あたしは慌てて彼のところへ走った。銃撃はなく、あたしは胸をドキドキさせながら彼の後ろに回り、そのジャケットの裾を掴む。

「クソ」

彼は悪態をついていた。どうやら、今の自分の弾が当たらなかったことに腹を立ててるみたい。何か英語じゃない言葉だった。ブツブツと何かを言ったあと、あたしを振り返る。その手にはオレンジの缶詰。

「アンジェリカ、今からコイツを投げる。投げたら連中が顔を出す

から、どこに居るか見てくれるか」

「い、いいけど……。あたし撃たれない？」

「大丈夫だ。俺を信用しろ」

マクラ克蘭はあたしの回答を待たなかった。グツと缶詰を握って、横に放り出す。

ダンッ、タンッ、タン！ と銃声が鳴り響く。怖かったけど、仕方なくあたしは顔を出した。入口の方に影が二つとメタルの輝き。そこでグツとあたしの服の裾を引いたのはマクラ克蘭だ。

「どうだ、分かったか？」

「ええと……。入口の柱のところで、カート置き場の影に一人いるみたいけど」

「よし。偉いぞ」

軽くあたしの頭を撫でてから、彼はまたオレンジの缶を手にした。今度は二つ。

今度は前方にポーンと放る。すぐにまた銃声が後を継いだ。ブシユン、と缶が撃たれて中の果汁が飛び散る。しかしそれと同時にマクラ克蘭も撃っていた。顔を半分だけ覗かせ、缶詰のタワーに張り付くように伸ばした銃が火を吹く。今度は四発。ガラスや何かが割れる音の中に、悲鳴が二つ。ドサリという音の後に続いたのは静寂。

「すごい、すごい！」

素直に感心して、あたしは彼のジャケットを引いて微笑んだ。

「マックって、スゴ腕じゃん。眼鏡ないとぜんぜん見えないって言うてたのに。すごい、すごい」

怖くて怖くて心細かったけど、目が見えなくても狙い撃ちができるような男と一緒に何とかなるかもしれない。あたしは、この時になって本当に生き残れるかもしれないという思いを持ち始めていた。マクラ克蘭はというと、何も答えずにあたしをチラと見ただけだった。空になった弾倉のカートリッジを床に落とすと、また新しい弾倉をセットする。

「まだ他の連中が外にいる。今のうちに早く眼鏡を探して、このシヨッピングセンターを脱出するんだ」

「うん」

「……で、階段はどっちだ？」

「今度は１１時の方向よ」

笑顔になったあたしは、自分から彼の手を握ると階段の方へと引っ張った。

二階に着いても、明かりは窓から差し込む街灯の光だけ。薄暗い店内は静まり返り、眼鏡売り場をすぐに見つけられるというわけではなさそうだった。

「真っ暗だね、マック」

「おい。どうでもいいが、その呼び方やめてくれ」

ふいに、うんざりしたようにマクラクランが言った。

「まるでハンバーガー屋か、いんちきスコットランド人みたいじゃないか。俺はカナダ系だ」

「そうなの？」

「呼びにくいならケンでいい。……間違っても、ケニーとか呼ぶなよ。俺はアメリカ人は好きだが、なんでもＹを付けて呼びたがるところは大嫌いなんだ」

「う、うん。分かった。じゃあ、あたしのこともアンって呼んでよ」
そうあたしが言うのと、マクラクランは口を歪めて笑っただけだった。急げ、と一言だけ言い放つと、あたしの手を引いて大股に歩き出す。

「おい、前にあるのは非常口で合ってるよな？」
歩きながら彼が言った。あたしは、うんと返事をする。眼鏡売り場に行かなくていいの？ と聞こうと思ったけど、マクラクランは靴下が山積みされたワゴンを回り込んで、スタスタと足早に非常口の前にまでたどり着いていた。

そこで一度あたしの手を離すと、彼は銃を両手に持ち替え、非常

口の窓から注意深く外を覗いた。物音一つしない。外にも誰もいないみたい。

「こういうときは、まずは逃走経路を確保しとくんだ」

マクラクランはあたしに向かって小声でそう言うと、左手でそつとドアのノブに触れた。

「しまった！」

突然、叫んだマクラクラン。あたしは何が起こったのか分からないまま、物凄い轟音を聞いた。

身体を投げ出されて次の瞬間には、ハンガーに吊るされていたシヤツと一緒に床に転がっていた。背中が重い。目を開けて、何がどうなったのか見ようとして初めて、マクラクランがあたしの上に覆いかぶさるように倒れていることに気付いた。

「ケン！」

「……大丈夫か？」

ゆっくりと、彼は身体を起こした。その後ろに見えるのは、夜空と隣のビル。非常口のドアは吹き飛んで、あたりには何か煙のようなものが充満していた。ドアが 爆発した？

あたしも身体を起こそうと右手を付いて、突然走った痛み、痛ッ、と声を上げてしまった。血は出ていないのに、どうして？

「どうした？」

「右手が……」

そう、あたしが言いかけた時。突然マクラクランは、懷から銃を出すと身体を反転させて撃った。続けて二発。紳士服のディスプレイに穴が開いたけど、悲鳴はしなかった。

サツと隠れた影が一つ。マクラクランはそこに向かって、続けて撃った。

「アンジェリカ！ 早く、そのショーケースの後ろに隠れるんだ！」

撃ちながら叫ぶ。あたしは慌てて言われた通りにショーケースの後ろへと隠れようと、立ち上がり走った。その間も銃撃は続いている。ギャツという悲鳴を背中であく。一瞬、マクラクランかと思ったけど、違ふみたい。なぜって銃声があまったから。

ホツとしたあたしは振り返って、彼の姿を確認しようとした。けど、いきなり誰かに腕を掴まれた。

「キャツ」

そのままあたしは陰に引き込まれ、後ろから首に太い腕を回されガツチリと抱きすくめられた。頭に固いものを押し付けられる。銃口だ。

「アンジェリカ！」

マクラクランは、銃をこちらに向けながら立ち上がった。あたしを捕まえた男は、半身だけ出しマクラクランの姿を見、言った。

「デザート・イーグルか。レトロな銃使ってやがるな、オツさん」
顔は見えないが、声は若い男のものだった。慣れ親しんだスペイン語訛りの英語。

「誰に雇われた？ そいつの名前を言えば、オツさんだけは見逃してやってもいいぜ」

「お前さんこそ、どこにオツムを落としてきたんだ？ 俺の仕事はその子を守ることだ」

マクラクランは動じた様子もなく、淡々と言った。

「そのまま撃つたら、お前の身体の風通しを良くしてやる。たくさん風穴を開けてな」

「言ってくれるねえ。オレの罠にまんまと引っかかったくせによ……って、オイ、ちょっと待った！」

笑い声を上げようとした男は言いかけて、急に言葉を止めた。あたしを締め付ける力が少し弱まる。

「よく見たらお前、リバティ・シテイの？ ルクリュ？ のオヤジじゃねえか！ 何でこんなところにいるんだ？」

言われて、マクラクランは目線を少し躍らせる。

「ああ、そういうお前さんは、いつも女連れで来る兄さんか。奇遇だな」

「マジか？ 本当に本人かよ！」

二人は顔見知りみたいだった。あたしは何がなんだか分からなかったけど、この状況を早く脱しなきゃ、とそう思った。そしてそれは今だ、と。

えいッ。声を発しながら、あたしは靴の踵で、男の足を思いっきり踏みつけた。

「ぐわっ」

男が悲鳴を上げ、手を緩めた。相手の腕の中からサッと首を抜き、あたしは本能的に身体を伏せて転がるように走り出す。

「アン！ 伏せろ！」

マクラクランが横に跳んだ。あたしは頭を抑え、反対側に跳ぶように伏せた。

ダン！ ダッダッ！

続く銃声。悲鳴。走る音。何かが倒れて割れる音。あたしは耳をふさぎ、轟音の中で震えていた。マクラクランがどうなったのか、心配で心配でしかたなかったけど、顔を上げる勇気が出なかった。ふいに腕を取られ、引っ張り上げられる。マクラクランだった。早く、と言いながら駆け出す彼。あたしは震える足をもつれさせながら立ち上がった。

銃撃は止んではいなかった。強く腕を引かれたと思ったら、マクラクランがあたしを庇うように立って、反撃していた。二発撃ったあと、そこに隠れる、と鋭く言いながら、あたしの背中を突き飛ばすように押した。あたしは走った。頭の中に銃声がガンガン鳴り響いて、気が遠くなりそうになる。

もう何がなんだか分からないうちに、あたしたちは大きなボツクの陰にもぐりこんでいた。婦人服の試着室が並んでいるところだ。そして、銃撃が止んだ。

「痛いかな？」

「うん……。でもこれならしばらく我慢できる」

あたしの右腕に板切れとＴシャツをぐるぐる巻きつけ、即席のギブスを完成させてから、マクラ克蘭は黙り込んだ。ブルーの瞳を伏せ、深く息を吐く。何だか元気がない。あの爆発のことなのかどうか分からなかったけど、彼はひどく落ち込んでいるみたいだった。試着室の壁にもたれ掛かろうとして、マクラ克蘭は、痛ツとつぶやいた。さっきのあたしと同じように。

どうしたの？ と聞いたら彼は何も答えなかった。見たらジャケツトの背中がボロボロ。きつとさっきの爆発だ。あれで怪我をしたんだ。そう思っただけをかけたように思ってたけど、彼の横顔は人を寄せ付けないような雰囲気を感じさせていた。

立ったままの無言の二人。マクラ克蘭の手には大きくて無骨な銃。

「ねえ、ケンはいつもはリバティ・シティに居るの？」

何か話題が必要だ。思い切って、あたしは彼に話しかけた。

「そうだ。店をやってる」

「店？」

「レンタカー屋だよ」

あたしが何か言う前に、マクラ克蘭は続けた。「ラリーが……いや、ファーガソンさんが裏家業から手を引くときに、俺も銃を捨てたんだ」

「引退したってこと？」

「そうだ」

こちらに顔を向けるマクラ克蘭。

「レンタカー屋になって引退するのが夢だったんだ。夢がかなったって思ってたが、ここにこうやっていること自体、過去からは逃れられないのかもしれない」

そう言ったあと、マクラ克蘭はあたしの右手を シャツでぐる

ぐる巻きにされた手の平をそつと握った。

「ごめんな。お前に怪我をさせちゃった。眼鏡がなきゃ何も見えな
いし、さっきだって調べないでうっかりドアを開けちゃった。俺は
もうロートルだよ」

「そんなことないよ！」

あたしは慌てて言い返した。

「ケンがよくやってくれてるよ。ケンが来てくれなかったら、あた
しこの店の前で撃たれて死んでた」

マクラクランは微かな笑みを浮かべ、あたしを見下ろした。言葉は
無かったけどブルーの瞳が、語りかけていた。ありがとう、と。

「あたし、何も持つてないけど……」

それを見たら、胸がいっぱいになって。あたしは彼に抱きついた。
背の低いあたしの顔は、彼のお腹ぐらいにしか届かない。身体をギ
ュツと押し付けるようにしてしがみついた。

「ここを出られたら、ケンにお礼したい。何もないから、あたし身
体でしかお礼できないけど」

「おい、何を言ってるんだ」

急にマクラクランがあたしの両肩を掴んだ。強い力だった。えつ、
と顔を上げると、彼は怖い顔であたしを見下ろしてた。

「アンジェリカ。そういうことを二度と言うな」

グツとあたしの身体を離し、言う。「お前みたいなコは自分を大事
にしなくちゃ駄目だ。簡単に男に気を許すな」

「ごめん、だつて」

胸を締め付けられたような気持ちになって、あたしは泣きそうにな
った。自分に出来る最大のことを言っただけなのに。

すると、ふいにマクラクランが表情を緩めた。あたしの頭にポン
と手を置いてくしゃくしゃと撫でる。まるで子どもに対してするみ
たいに。

「アン。俺みたいなの奴に恩なんか感じなくなつていいんだ。俺たち
は大人の論理で、お前を利用しようとしてるだけなんだぞ」

「あたし、子どもじゃ……」

じわ、と涙が出てきて、続く言葉を言うことができなかった。マクラ克蘭がそつとあたしの手に触れる。そのまま彼はあたしを抱きしめてくれた。腰を屈めて、あたしに目線を合わせて。

「よく聞くんだ。この国には証人保護制度というものがある。裁判に出たあと、政府がアンの命を守ってくれる。アンはアメリカのどこかで名前を変えて暮らせるんだ。こんなダウンタウンじゃなくてもいいところだ。学校に行つて勉強することだってできる」

あたしは彼の背中に手を回そうとした。けど、広すぎて手が届かない。

「10年後だ。10年経つたら、この町に戻つてきな。そして俺の店に来ればいい。お前がやって来たら、その日は店を閉めてマイアミ中をドライブに連れてつてやるよ。その頃なら、お前もイイ女になつてるだろう？」

……だから、泣くな。マクラ克蘭はあたしの身体を離し、もう一度頭を撫でてくれた。

目をこすってから見上げると、彼はにっこりと微笑んでいた。

「さあ、行くぞ。俺はラリーの下で7年働いたが、一度もしくじつたことは無いんだ」

そう言いながら、あたしの怪我をしていない方の手の平を強く握るマクラ克蘭。

うん。あたし、ケンを信じる。あたしも彼の手を強く握り返した。

チツ、と舌打ちしながら、弾倉を入れ替えるマクラ克蘭。相手は3人ぐらいいるみたいだった。固い石の柱の陰。半額セール実施中と書かれたポスターの下に身を隠すあたしたち。こちらに向かつて、雨のように銃弾が撃ち込まれている。欠けた石があたりに散らばって埃を巻き上げる。こちらが不利なのは明らかだった。

目指すのは眼鏡売り場。しかしその向こうのスポーツ用品売り場

に男たちが陣取っていて、一步も近づけない。壁に立てかけられた大きなサーフボードの陰からひっきりなしに銃口がのぞき火を吹いている。

突然、マクラ克蘭が顔を上げ、今までと違う方向に銃を撃った。男の悲鳴！ 遅れて、そっちを見たら、ショーケースの脇に一種だけ誰かの影が見え、そして消えた。

「クソッ」

あたしにも分かった。今のは致命傷じゃない。敵はあたしたちを囲むように回り込もうとしてる！ このままじゃ、まずい。チラリとこちらを見たマクラ克蘭の目も、そう言っていた。

だけど今の牽制が聞いたのが、一瞬だけ銃撃が止んだ。

「……おい、レンタカー屋」

埃が舞う中、ふいに声が聞こえてくる。

「分かったぜ、あんたの正体。あのクソツタレのファーガソンに言われてきたんだろ？」

さっきの、あたしを羽交い絞めにした男の声だ。

「ファーガソンの子飼の中に“ピース通りの悪魔”って呼ばれる奴がいたって聞いたことがある。噂によればフランス訛りの白人だって話だ。あんたと特徴がピッタリ一致する」

男は一度言葉を切った。「5年前、マイアミシティ中のギャングが揉めた、あの麻薬戦争のときだ。ファーガソンはピース通りに血の雨を降らせて、きっちり自分の取り分を取った。30人以上を殺し、4つのギャングを壊滅寸前に陥らせてな。……あの事件は、あんたの仕業だな」

シン、という間がその言葉の後に続いた。マクラ克蘭は銃を両手に持ち替えただけで、何も答えなかった。表情も、目の色も全く動かない。

「オレの兄貴分も、あの夜に死んだ。片腕を吹っ飛ばされてな」
ジャキッという銃を動かす音。

「いつか兄貴の仇を討とうと思ってたが、その仇敵と毎週会ってた

とは、とんだお笑い種だぜ」

無言のマクラクランは、一瞬だけ床のあたりに視線を巡らせる。

「今夜はパーティだ。すぐには殺さねえ。手足を撃ち抜いて動けなくしてから、地獄の苦しみを味あわせてやる。悪魔に相応しい死に様をプレゼントしてやるよ！」

そこで動いたのは、マクラクランの方だった。

あたしをその場に残し、ふわりと物音もさせずに隣の柱へ移動した。あつ、と思う間もなく、姿を目で追うと、彼は銃を斜め上に向けて撃っていた。二発の銃声。カシャーんと音がして天井の照明が割れて下に降り注ぐ。

「ウワッ」

男たちの驚いたような声が上がった。マクラクランは柱の陰から全身を躍らせて、撃っていた。ドンッ、ドンッと鈍く重い銃声。誰かが叫んだ。立て直せ！ とかそんなようなことを言っている。

マクラクランはそのまま、もう一本前の柱の陰に走りこんだ。カランと弾倉を落とし、こちらを見る。目を細め、見えないなりにあたしの姿を一生懸命確認しようとしながら、手を軽く挙げて、そこで大人しくしてるんだと言う。

それに頷こうとして、あたしはふと気付いた。男たちのうち何人かが、スポーツ用品売り場から逃れた。これなら眼鏡売り場までの道が。

そう思ったとき、あたしは立ち上がり走っていた。眼鏡売り場へ。視界の隅でマクラクランが驚いたような顔をしているのが目に入った。でも、止まらない。

マクラクランは悪魔かもしれない。何十人もの人を殺してるって、さっきの男も言ってた。彼はあたしを利用しようとする大人の手先にしか過ぎないのかもしれない。

けど、あたしは彼に恩返しがしたかった。撃たれて死ぬかもしれない

ないとは思ったけれど、彼が死んだらきつとあたしも殺される。だからあたしは走った。

猫に見つかったネズミみたいに、あたしは跳んだ。廊下に飛び出し、そのまま滑り込むように眼鏡の並んだ台の下に潜った。怪我をした右手が床に当たって、涙が出るほど痛かったけど。こつちに銃弾は飛んでこなかった。

身体を起こす。眼鏡を 彼に、マクラ克蘭に渡さなきゃ！

そばの花瓶の下に引いてあった敷物を掴み取ると、手近な眼鏡をいくつか包み込む。

「ケン！」

力を振り絞って、あたしはその布の固まりを投げた。

舞うように飛んでいく包み。目を見開いたマクラ克蘭。

でも、包みが途中から、ほぐれていった。その動きがスローモーションのように目に映った。しまった、と思ったけれど。あたしの思いも空しく、敷物はパツと広がって抱えていたものを宙に吐き出した。

キラキラと少ない明かりに照らされて、たくさんの眼鏡が宙に散乱し床に落ちていく。パリン、パリンと割れて飛び散るガラスの破片。

そんな……。

絶望しそうになったとき、ぬつと突き出された黒い袖が視界の中に飛び込んできた。

床に落ちる寸前の一つ的眼鏡を掴んだのは、マクラ克蘭。あたしを守ってくれる 1人の悪魔。

悪魔は、くるりと踊るように身体を反転させた。

そしてまっすぐ横に突き出した腕。重厚な黒い銃。それが 二回、唸るように衝撃を発した。

あらぬ方向に飛んでいった弾は、柱に当たりチュンツと、跳ね返る。

「どこに向かつて撃つてやがるんだ！」

相手の男が声を上げた。「この時代遅れのロートル……」

「ガッ」

他の悲鳴がその言葉を遮った。

「何だと!？」

マクラクランはもう一步踏み出し、今度は銃を両手に持ち替えて反対側に撃った。

弾はまた柱に当たり、高い音をさせて跳ね返る。

「後ろだ！」

男が叫んだ。けど、遅い！ 前方の棚の後ろで鈍い音と、ウツという声。そして最後には人が倒れこむ音がした。

次に行くのは静かな間。

すごい。

あたしは驚きのあまり口をポカンと開けてしまう。マクラクランは、物陰に隠れた相手を、柱に当て跳ね返らせた銃弾で狙撃したのだ。それも続けて二人も。

「悪いが、室内は俺の専門でな」

ジリ、ともう一步だけ踏み出しながらマクラクランが言った。

「ご期待に沿えず申し訳ないんだが、俺はもう悪魔じゃない。ちょっとだけ銃の扱いに長けた、ただのレンタカー屋だ」

彼はニヤリと笑ったようだった。

「俺は、お客に対するサービスは徹底するように心がけてるんだ」
ゆらり。マクラクランは銃を持つ手を上げる。「……だから、苦しまないように、次の一発で確実に殺してやる」

「ま、待ってくれ」

男が物陰から半身を露わにした。銃を捨て、何も持っていない手を挙げてみせる。

「助けてくれ！　オレはもうあんたに危害を加えない。だから見逃してくれよ」

マクラ克蘭は銃を下げた。

例の若い男は、おずおずと全身を現すと、腰から下げていた銃を外してジャケットを脱ぎ捨てた。そして戦意がないことを証明するかのようにはらへらと笑ってみせる。

「オレはマイアミを離れる。それでいいだろ？　明日の飛行機でL・A・にでも……」

言いかけた男に向かって、突然マクラ克蘭は撃った。男は身の毛もよだつような悲鳴を上げた。驚いて、あたしもマクラ克蘭に駆け寄る。

あたしを見ると、マクラ克蘭は眼鏡の奥で眉をひょいと上げただけだった。見れば、男は両手から血を流して、ウンウンと唸っているだけだ。手の平を撃ち抜いたのだ。

「マイアミを離れなくなっただけいいし、俺の店に来て構わん。お前さんにその度胸があるならな」

そう言い放った悪魔は、あたしの手を取って、何事もなかったかのように微笑した。

「メルシー・ビヤン」

ありがとう、という意味なのか。マクラ克蘭はそう言うと、あたしの手を引いて非常口の明かりへと歩き出した。軽やかな足取りで、銃を持ったままの手の中で眼鏡を直しながら。

緊張の糸がほぐれて。あたしは急に足がガクガクしてきて、マクラ克蘭にしがみついた。抱きついてても、あたしの顔が当たるのは、相変わらず彼のお腹。でも、構わなかった。

必死に彼に掴まろうとするあたしを見下ろして。彼は声を上げて笑った。そして、あたしの頭の上にポンと手を置いてくれた。

階段を降り立つと、人気のない裏道に出た。ここからどこに行くのだろうと思ったら、こちらに向かつて猛然と走ってくる車が一台あたしがビクと身体を強張らせたら、大丈夫だよ、とマクラ克蘭が言った。

キキーツと急ブレーキの音をさせて、車があたしたちのすぐそばで止まる。運転席から顔を出したのはアフロ頭の黒人。白い歯を見せてニイッと笑う。

「よう、生きてたか。悪魔」

「何とかな」

マクラ克蘭が答えるのと同時に、後部座席のドアが開く。こちらから顔を出したのは、グレーのスーツを着た白人の男で、熊のように大きな男だった。

男はマクラ克蘭を見、そしてあたしを見ると、もう一度視線をマクラ克蘭に戻す。

「ご機嫌よう、ミスター・メイプル。ご無事で何より」

仰々しい言葉を、訛りまくった巻き舌で並び立てると、男はニッコリと微笑んだ。

「さ、お嬢様をこちらへ」

「ハッ、変わらないな。ミスター・ボルシチ。クソ弁護士め」

マクラ克蘭は、あたしの背中をそっと押し車に乗るように促した。「……それにゼットも。相変わらず元気そうだな」

「オレは“ズイー”だ。ゼットじゃねえつつつたる？ この、おフレンチ野郎」

三人はニツと笑い、大男とマクラ克蘭は気の合った友人同士みたいに、あたしの頭の上で、手をパンと打ち合わせた。きつと昔の仲間なんだ。あたしはホッとして男の隣に座った。

あたしが車に乗り込むのを確認すると、大男がふと真顔になった。「ケネス、君は……」

「分かってる。すこし後片付けが必要だな。この子はアンジェリカ

だ、よろしく頼むぜ」

「悪魔が天使を連れてきたのかい？ 面白いジョークだな」

大男に笑みを返すと、マクラ克蘭はあたしの頭を軽く撫でた。車には乗らずに身体を引いていく。

「えっ？」

その手を掴もうと手を伸ばしたけど、届かなかった。

「ケン、これを持ってけ」

黒人の運転手がイヤホンのついた携帯電話みたいなものを、マクラ克蘭にポンと放った。

「お前みたいじゃローテクには分からねえかもしれねえが、そいつはアイ・ポッドっていうシロモノだ。ちよいと改造して警察無線を傍受できるようにしてる。イヤホンをずっと耳に突っ込んで。無線を聞きたくなけりゃ、おいらのお気に入りのアーティストを何曲か入れといたからそれを聞きゃアいい」

「助かるよ。ヒップホップは嫌いだがな」

マクラ克蘭は笑ってそれを受け取ると、イヤホンを耳につけてみせた。すると今度は大男の方が彼に声をかけた。

「向こうの五番街の方にトヨタを置いておいた。君はそれを使ってくれ。それから困ったときはウィルソンかスウェイジという名前の警官を頼れ。そいつらがラリーの息のかかった連中だ」

「OK。じゃ俺は……」

「ケン！ 待って」

あたしは身体を乗り出し、ようやく彼の手を掴むことが出来た。

「行っちゃうの？」

「ああ。ここでお別れだ。アンジェリカ」

眼鏡の奥のブルーの瞳。それがまっすぐあたしを見つめてる。

「こいつらは俺の昔の仲間だ。そのデツかいロシア訛りのオッサンは弁護士で、法廷までお前にずっと付いててくれる。だからもう安心していいんだよ」

「やだ、ケンと一緒にいい！」

他の二人がくすくす笑う声がした。けど関係ない。あたしはじつと彼の顔を見上げている。彼は困ったような顔をした。

「アン、いい子だから」

ふいに腰を屈めたマクラ克蘭。そつと顔を近づけてあたしの頬にキスしてくれた。

「ケン……！」

「イイ女になつて帰ってくるんだぞ」

耳にもキスできるぐらい唇を近づけて。優しく囁くマクラ克蘭。突然のことで、あたしは顔が熱くなった。頭がぼうつとなったときに、ヒュウ。誰かが口笛を吹いた。

その隙にマクラ克蘭はサツと身体を引いて車のドアを閉めた。笑顔のまま、手を振る。慌てたあたしはドアにしがみつくように外を見た。

「ケン！」

運転手が車を発進した。流れ出す視界の中で、マクラ克蘭の姿が遠く、彼の笑顔が離れていく。

あたしは窓にしがみつき、窓を開けて顔を出した。危ないからよしなさいだとか、隣で大男が言つてたけど無視した。

あたしたちの車から目をそらし、身体を向こう側に向けたマクラ克蘭。

ゆっくりと一歩ずつ、歩き出す。

「ケン！」

どうしても言いたいことがあつて、あたしは叫んだ。窓から顔を出して。

マクラ克蘭の背中。黒尽くめの、銃を手にした悪魔の背中は、ぼんやりと光る街灯の下に溶け込むように、小さくなっていく。

「チヨコレートサンデー奢ってくれるって言つてたじゃん！ 嘘つき！」

声が聞こえたのか。足を止め、彼は顔を傾けこちらに横顔を見せ

た。

すらりと伸びた両手。片手には銃。

そのシルエットにあたしは目を凝らした。あの背中を目に焼き付けようと、何年経っても彼の姿を忘れないように。

「あたし絶対帰ってくるから！ ジェニファー・ロペスみたいなイイ女になって帰ってきたら、ケンに最高の眼鏡、プレゼントするから！ だって、今かけてるそれ、どう見ても女モンだから！」

そこで車が角を曲がり、彼の姿はビルの陰に消えていった。

それでもあたしは確かに見た。

マクラ克蘭の横顔と、彼の口の端に浮かんだ失笑を。

（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

もしよろしかったら、ご感想くださいませ。 大変はげみになりますので。

本サイト <http://talkingrabbit.net/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8286a/>

Girl, Glasses, and Guns / 少女と、眼鏡と、銃

2010年10月11日18時17分発行